



中国留学だより



北京大学西門

文化創造学部多元文化専攻の
曹述燮(チヨ スルソップ)助教授の専門は、
東アジアの説話文学、仏教文学です。
昨年秋から北京大学の客員研究員となり、
中国文化の研究に打ち込んでいます。
今回は中国の旧正月にまつわる風習について
報告していただきました。



留学生宿舍勺園の前で

文化創造学部助教授
Jo Sulseob (曹述燮)



北京市内で爆竹が許可されたのは今年13年ぶりのこと。
いよいよ大晦日、夕方からは続々と花火が上がり爆竹が鳴らされました。

学

園や先生がたのご理解を蒙って
始めさせていただきました北京
大学中文系での訪問学者生活。北京や
北京大学に関しては、書店などの各種
冊子や巷の情報のほうが詳しいかと
思われるので割愛させていただきます。中国
の「過年」^{グオニヤン}習俗の説話の紹介と、今年
の北京での「過年」^{グオニヤン}(2006年1月28
日)と「爆竹」に関する報告を、感謝の
気持ちに代えてお届けしたいと思いま
す。

昔

々、中国には「年」と呼ばれる獐
猛な怪物が居りました。長い髪、
鋭いひづめを持つ「年」は、いつもは深い
海底に住んでいます。毎年大晦日に
なると海岸の村まで上り、人命や家畜
を飲み込みました。だから「年」が現れ
る大晦日には、村人みなが連れだつて深
い山奥へ避難しました。

ある年の大晦日、いつものように村の
みなは大忙しで荷造りをし、深山へと
向おうとしていました。その時、村の東
に住む老婆の家に一人見知らぬ白髪の

老人が訪ねて来ました。
「あなたのお家に一晩泊めさせてくれ。
わたしがその「年」を追い出してやるか
ら…」
老人の言うことを信じる村人は誰一
人としておらず、
「一緒に山奥に避難したほうがいいよ」
と言うだけで、それぞれ避難を急ぎ
ました。村に残ったのはその老人だけ
です。

「年」が来た!
例年どおり村に入った「年」は、いつも
と同じように残酷な行為を働こうとし
ました。その瞬間、ぱん、ぱん、ぱん
ん! 大きな大きな爆竹の音が鳴り響
きました。その音を聞いた「年」は身震
いが止まらず、二歩も前へ進むことがで
きません。
やつこの思いで大きく開いた門の奥を
見ると、そこには爆竹が轟音を立てな
がら火花を散らしており、そばで赤いマ
ントを掛けた老人が大笑いをしており
ます。青ざめた「年」は大慌てで逃げ出
すだけでした。

翌

日、村人たちが自分たちの家へ
帰ってきました。家も村も無事
です。実は白髪の老人は仙人で、「年」
が一番怖がるものが赤色、光、そして爆
竹音であることを知っていたのです。

これ以来、大晦日には中国の村のすべ
ての家では、門の外に赤色の対聯を貼り、
爆竹を鳴らし、夜通し灯籠を高く掲げ
て新年を迎えるようになりました。

上

記が中国の大晦日の習俗「過年」^{グオニヤン}
の説話です。人畜に危害を加え
る獐猛な怪物が町や村に現れる大晦日。
その怪物を震え上がらせる威力を持つ
爆竹ですが、取り扱いの安全性に問題
があるという理由で、北京では長い間鳴
らすことが禁止されていました。

北

北京市内で爆竹が許可されたのは
今年13年ぶりのこと。22日くら
いから道端に爆竹や花火を売る屋台が
登場し、その夜からぼちぼちと打ち上
げ花火や爆竹の音が聞こえ始めました。
爆竹音は日増しに盛んになり、そしてい
よいよ大晦日。明るいうちから花火が
上がり、爆竹が鳴ります。
「まだ昼間なのに、もう鳴らすの?」
と思っているうちに夕方になり、続々と
花火が上がり、爆竹が鳴り始めました。
辺り一面、喧騒音とともに白煙と火薬
臭に包まれ、それは深夜2時を過ぎて
も、続きました。翌朝は7時前から、早
くも爆竹音が鳴り響きます。こんな状
態が上元節(旧暦の1月15日)まで続き
ました。

今年の大晦日、北京に現れようとし
た「年」は海岸を上がった時点で縮み上
がったか、あるいはとくに命を落として
いるに違いありません。私は臆腫とし
た意識で春節の朝を迎えました。活字
で読み、噂に聞いていた「過年」^{グオニヤン}と「爆竹」
「ここまでやるか…」と感心せざるを得
ませんでした。